

自尊感情の 3 様態¹——自尊源の随伴性と 充足感からの整理——

伊藤 正哉^{2,3} 国立精神・神経医療研究センター 川崎 直樹 北翔大学

小玉 正博 筑波大学

Three types of self-esteem: Its characteristic differences of contingency and contentment of sources of self-esteem

Masaya Ito (*National Center of Neurology and Psychiatry*), Naoki Kawasaki (*Hokusho University*),
and Masahiro Kodama (*University of Tsukuba*)

Previous research and theory (Crocker & Wolfe, 2001; Kernis, 2003) suggests that adaptive self-esteem stems from just being oneself, and is characterized by a sense of authenticity (SOA). Maladaptive self-esteem is derived from meeting external standards and social comparisons, and is characterized by a sense of superiority (SOS). Thus, the qualitative difference between SOA and SOS depends on the sources of self-esteem. We hypothesized that SOA is related to internal sources of self-esteem, while SOS is related to external sources. In order to control for covariance, global self-esteem was also examined in a questionnaire survey of self-esteem that was administered to 273 university students. The results of a partial correlation analysis showed that SOA was positively correlated with internal sources of self-esteem such as committed activities and efforts for self-development. In contrast, SOS was positively correlated with external sources of self-esteem such as approval from others and appearance. These results mainly support our hypotheses.

Key words: contingent self-esteem, contingencies of self-worth, sources of self-esteem, sense of authenticity, sense of superiority.

The Japanese Journal of Psychology
2011, Vol. 81, No. 6, pp. 560-568

近年まで全般的自尊感情の水準 (level of global self-esteem) は人間の精神的健康や社会的適応の強力な予測要因であると考えられてきた (Heatherton & Wyland, 2003; Roberts, 2006)。しかし、全般的自尊感情の高さが逆に不適応的な行動や性質につながるとの報告がされ (Baumeister, Heatherton, & Tice, 1993; 伊藤・小玉, 2005), 全般的自尊感情の水準のみから個人の適応や精神的健康を理解しようとする試みに対しての限界が指摘されている (Baumeister, Campbell, Krueger, &

Vohs, 2003; Kernis, 2003)。そうした問題意識に刺激され、全般的自尊感情には様々な性質が混在するという考えをもとに、自尊感情の下位様態を想定する様々な研究が展開されている。そのなかでも、適応的な自尊感情と不適応的な自尊感情を区別する観点として、自尊感情の随伴性に注目する二つの見解が提示されている。一つは Kernis (2003) ならびに Deci & Ryan (1995) による随伴性自尊感情 (contingent self-esteem) についての考えであり、もう一つは Crocker & Wolfe (2001) による自己価値感の随伴子 (contingencies of self-worth) についての考えである⁴。

Kernis (2003) による随伴性自尊感情の議論は、個人のもつ自尊感情が随伴性のものなのかそうでないの

Correspondence concerning this article should be sent to: Masaya Ito, National Center of Neurology and Psychiatry, National Institute of Mental Health, Ogawahigashi, Kodaira 187-8533, Japan (e-mail: masayait@ncnp.go.jp)

¹ この発表に際して、平成 17 年度科学研究費補助金 (特別研究奨励費 研究課題番号 18・3908) の補助を受けた。また、本研究の一部は日本心理学会第 70 回大会と第 71 回大会で発表した。

² 日本学術振興会特別研究員

³ 本研究に参加していただきました大学生のみなさまに、こころより感謝の気持ちを申し上げます。

⁴ 自尊感情と自己価値感には微妙な概念的差異がある。前者は特性的な、後者は状態的なニュアンスをもつ概念とされている (Brown & Marshall, 2006)。全般的な自己価値の感覚である点で両者は同義である (Baumeister et al., 2003; Kernis, 2003) が、上記の時間幅の相違、ならびにそれぞれの先行研究の用語の使用を考慮に入れて、本論文では両用語を使い分けている。

か、という次元上での随伴性を前提としている。ここで言う随伴性とは、外的な評価を得たり内的な価値基準を達成したりすることと自尊感情が連合している程度を意味しており、このようにして得られる自尊感情が随伴性自尊感情と呼ばれている。この随伴性自尊感情に対置して、Deci & Ryan (1995) は本当の自尊感情 (true self-esteem) という概念を理論的に想定している。本当の自尊感情とは、ただ単に自分らしくいることによって自然と生起する自尊感情であり、その生起には何らかの外的成功や他者の評価といったものを必要としない。適応・不適応性の観点からみると、随伴性自尊感情は外的な評価によって影響を受けやすいという不安定な性質をもつために不適応的であり、本当の自尊感情はそうした影響を受けにくいために安定した適応的な自尊感情であると考えられている。

随伴性の観点から自尊感情を捉え直すもう一つの観点である Crocker & Wolfe (2001) の理論では、自尊感情はもともと必ず何らかの物事に随伴しているものであり、随伴する対象 (以下、随伴子とする) は人それぞれで異なると考えられている。そして、他者からの承認、外見、競争、学業の有能さ、家族の支え、美德、神の愛といった七つの自己価値の随伴子を測定する尺度が作成されている (Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bouvrette, 2003)。これらの随伴子は、前文で表記した順に外的-内的な性質をもつとされ、高次因子分析を用いた研究では他者からの評価、外見、競争、学業の有能さが外的な随伴子として、美德と神の愛が内的な随伴子として報告されている (Sargent, Crocker, & Luhtanen, 2006)。この研究では適応・不適応性の観点からの検討がされており、外的な随伴子に自己価値感が随伴している場合に抑うつ傾向が悪化し、内的な随伴子ではそうした傾向がみられないことが報告されている。

以上のように、随伴性という観点から自尊感情概念を精緻化する二つの見解をみてきたが、前者の Kernis (2003) による見解は自己価値感の全般的な随伴性の個人差を考慮するという点で個人間アプローチと呼ばれている。一方、Crocker & Wolfe (2001) の考えは個人のなかにおいても自己価値感の随伴する程度はその随伴子によって異なるという意味で個人内アプローチと呼ばれている (Crocker & Wolfe, 2001; Kernis, 2003)。両者の見解は必ずしも対立するものではなく、むしろ相互補完的であるとされる。すなわち、個人間アプローチは特性レベルでの自尊感情の性質を検討するのに有用であるとされ (Kernis, 2003)、個人内アプローチはより具体的に個々人の行動・動機づけ・情動のあり様を検討することにおいて有用であるとされる (Baumeister et al., 2003; Crocker & Wolfe, 2001)。

しかしながら、両アプローチがどのように接合され

るのかについては、これまで実証的な検討がなされていない。適応・不適応性という観点から両アプローチをみると、個人間アプローチでは自尊感情が随伴的である程度、あるいは自尊感情が随伴性自尊感情か本当の自尊感情のどちらであるかによって精神的健康が左右され、個人内アプローチでは自己価値の随伴子が外的なものか内的なものかによって精神的健康が左右されると考えられている (Crocker & Wolfe, 2001; Kernis, 2003)。これらはそれぞれ対応関係にあると考えられ、Figure 1 に示されるような図式で捉えられる。すなわち、個人が随伴性自尊感情をもつとき、その自尊感情は外的な物事に随伴している自尊感情であると考えられる。一方、個人が本当の自尊感情をもつとき、その自尊感情は内的な物事に支えられている自尊感情であると考えられる (Arndt & Schimel, 2003)⁵。

本研究では Figure 1 を仮説モデルとし、これを検討することを目的とした。しかし、随伴性自尊感情と本当の自尊感情は理論的に想定されるに留まっておらず、それぞれを測定する指標は開発されていないのが現状である。そこで、前者の指標として優越感を、後者の指標として本来感を取り上げることとする。優越感とは、何らかの基準で他者と自己を比較した上で、他者よりも秀でていることで感じる自己肯定的な感情であり、随伴性自尊感情と概念的に近接あるいは重複していると捉えられている (Rhodewalt & Tragakis, 2003; Tracy & Robins, 2003)。他方、本来感は個人が自分らしくいられている全般的感覚を指し、自分らしくいられていることで自然と感じられる本当の自尊感情と概念的にかなり近接しており (Kernis, 2003)、先行研究でも本当の自尊感情として操作化され得ることが示されている (伊藤・小玉, 2006)。また、優越感と本来感に加え、本研究では全般的自尊感情も含めた検討を行うこととする。なぜなら、全般的自尊感情は優越感と本来感の両方を包含するより抽象的な概念と位置づけられ、こうした概念的な位置づけの確認の検討も必要であると考えられるからである。

随伴性については、個人間アプローチの観点から随伴性を捉える尺度として、自己価値感の全般的随伴性の程度 (Kernis, 2003) を使用する。Figure 1 に示されているように、Deci & Ryan (1995) や Kernis (2003) の個人間アプローチの考えにしたがえば、優越感はこの指標の高さと関連し、本来感はこの指標の低さと関連すると予測される。また、個人内アプローチの観点から自己価値感の随伴子を測定するものとし

⁵ Arndt & Schimel (2003) とは異なり、Kernis (2003) は本当の自尊感情は外的な物事だけでなく、内的な物事 (例えば、個人の価値基準や信念) にも随伴しにくいものであると考えている。大学生のほとんどが自身の自尊感情を何らかの物事に随伴させているという報告 (Crocker et al., 2003) を踏まえ、本研究では Arndt & Schimel (2003) の見解にしたがうこととした。

て、自尊源尺度（伊藤・川崎・小玉，2006）を使用する。自尊源（sources of self-esteem）は、自己価値の随伴子（contingencies of self-worth）と概念的にほぼ同義であり、自己価値感が随伴している物事の総称を意味する。この尺度は、日本人大学生に特化して作成されている。その尺度作成は日本国内外の文献レビューと、日本人大学生を対象とした資料に基づいており、その信頼性と妥当性が確認されている（伊藤他，2006；川崎・伊藤・小玉，2006）。自己価値感の随伴子を測定する尺度は他にもある（Crocker et al., 2003）が、上記のように日本人大学生を対象とした尺度構成の資料に基づいたものではない。自尊源尺度は特定の物事への随伴性に加えて、その対象における充足感を測定することができる。随伴性は、自尊感情の変動がその対象にどれだけ依存しているかを意味するが、この観点だけでは対象に対する感情価が把握できない。例えば、自尊感情が自分の外見に随伴しているとしても、自分の外見について不満を抱えている場合と充足している場合とでは、同一の対象に随伴しているとしてもその意味合いが全く異なる。このように、随伴性によって自尊感情への影響の強さを、充足感によってその影響の方向性を把握できるという利点がある。

Figure 1 で示した仮説モデルに基づき、優越感・本来感・全般的自尊感情についての仮説を以下に示す。優越感は、外的な領域における自尊源への随伴性ならびに充足感と関連するだろう。本来感は、内的な領域における自尊源への随伴性ならびに充足感と関連するだろう。全般的自尊感情は、本来感と優越感の両方の性質を含んでいると考えられる。よって、全般的自尊感情は内的・外的な自尊源の両方と関連するものの、優越感や本来感の影響を統制した場合にはその関

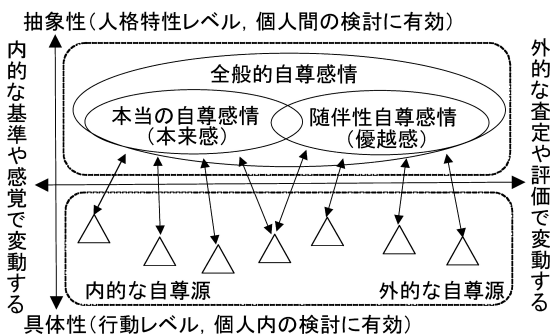


Figure 1. 個人間・個人内アプローチを接合する理論仮説モデル

注) 横軸は自己価値感の全般的随伴性（Kernis, 2003）とほぼ同義である。縦軸は概念の抽象-具体性を意味する。上部の点線四角内全体がこれまで漠然と捉えられてきた自尊感情概念である。下部の点線四角内の三角は様々な自尊源（随伴子）を意味する。楕円と三角とつなぐ両矢印は共変関係を意味する。

連性は消失するだろう。なお、本研究では優越感・本来感・全般的自尊感情の三つを指して自尊感情の3様態と呼ぶこととする。

方 法

手続き・調査時期

2005 年 9 月、大学の講義時間中に無記名・個別記入形式の質問紙調査を実施した。

参加者

インフォームドコンセントを経て、茨城県の国立大学生 273 名（男 158 名、女 115 名、平均年齢 19.48 歳、 $SD=1.26$ ）が調査に参加した。

測定内容

全般的自尊感情 自己についての全般的な肯定的評価、感情、態度の総体を意味する全般的自尊感情として Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の日本版を用いた（山本・松井・山成，1982）。本研究では先行研究（伊藤・小玉，2006；山本他，1982）に倣って項目 8（“もっと自分自身を尊敬できるようになりたい”）を除いた計 9 項目を用いた（5 件法）。

随伴性自尊感情（優越感） 外的な成果や評価に随伴する自尊感情を測定するものとして、自己愛人格目録（Raskin & Hall, 1979）を参考にして作成された自己愛人格目録短縮版の下位尺度である優越感・有能感（小塩，2004）を使用した。計 10 項目、5 件法である。

本当の自尊感情（本来感） 自分らしくいることで自然と生起する自尊感情として、全般的な自分らしさの感覚を測定する本来感尺度（伊藤・小玉，2005）を用いた。計 7 項目からなり、5 件法である。

自己価値感の全般的随伴性 随伴性についての個人間アプローチに基づき、個人の自尊感情がどの程度内外の物事に随伴しているのかを一次元上で測定する尺度として、自己価値感の全般的随伴性尺度（Paradise & Kernis, 1999）の日本版（伊藤・小玉，2006）を使用した。計 15 項目からなり、5 件法である⁶。

様々な随伴子への自己価値感の随伴性と充足感（自尊源の随伴性と充足感） 随伴性についての個人内アプローチに基づいて、自尊源尺度（伊藤他，2006）を

⁶ この尺度は英語で Contingent Self-Esteem Scale と名付けられている。しかし、実際に測定しているのは個人の自己価値感がどの程度随伴的な性質をもつかという全般的程度である。その意味で、この尺度の日本版を作成した研究では自己価値の随伴性尺度という訳語が与えられている（伊藤・小玉，2006）。本研究ではこれらを参考にしつつ、各自尊源への随伴性との弁別を明示するために、この尺度で測定する変数を自己価値感の全般的随伴性と呼ぶ。

Table 1
各自自尊源への随伴性と、全般的随伴性ならびに自尊感情の3 様態の関係^{a) b)}

	随伴性との単相関係数				随伴性との偏相関係数 ^{c)}		
	全般的随伴性	優越感	自尊感情	本来感	優越感	自尊感情	本来感
対人関係							
親密な関係							
家族とのつながり	.14*	.11*	.10 [†]	.09 [†]	.06	.01	.03
友人とのつながり	.34**	.08*	.04	.06	.07	-.04	.04
恋人とのつながり	.37**	.16**	.01	.05	.19**	-.12*	.05
関係の恩恵							
社会的な評価	.42**	.19**	-.02	-.02	.26**	-.15*	-.02
他者からの受容	.34**	.07	.03	.03	.07	-.03	.02
関係のスキル							
対人調和スキル	.37**	.09 [†]	-.03	-.01	.14*	-.10 [†]	.00
意志表出スキル	.23**	.12*	.09 [†]	.17**	.08	-.05	.14*
個人特長							
まじめさ	.14*	.14*	.11*	.17**	.08	-.03	.12*
やさしさ	.20**	.07	.06	.09 [†]	.04	-.02	.06
外見	.54**	.25**	-.03	-.06	.35**	-.17**	-.09
知性	.38**	.24**	.00	.02	.31**	-.18**	.00
運動能力	.38**	.20**	.01	.02	.24**	-.13*	.00
芸術的感性	.28**	.28**	.10 [†]	.13*	.28**	-.12*	.07
生き方							
打ち込む活動	.18**	.08 [†]	.08	.15*	.04	-.03	.12*
将来の目標	.20**	.11*	.12*	.12*	.04	.02	.07
成長への努力	.18**	.15*	.13*	.17**	.09	-.02	.12 [†]
過去の頑張り	.18**	.18**	.10	.18**	.14*	-.08	.14*

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

a) 5%水準で有意であった係数をボールド体で示した。

b) 表中では、全般的自尊感情を自尊感情と略している。

c) 偏相関係数は三つの自尊感情同士を統制した値である。

例えば、本来感の偏相関係数は全般的自尊感情と優越感を統制した係数である。

使用した。この尺度は階層的に整理されており、もっとも高次のカテゴリとして対人関係・個人特長・生き方という3領域が設定されている (Table 1 参照)。対人関係や外的な評価に関わる物事が外的な自尊源として捉えられていること (Kernis, 2003; Sargent et al., 2006) から、自尊源尺度のうち対人関係と個人特長に含まれる自尊源は外的な性質を強くもつと考えられる。一方で、生き方に含まれる自尊源は内的な性質をもつものであると考えられる。17の自尊源について、それぞれ3項目でその随伴性 (その自尊源がどれだけ全般的自尊感情に関わっているか) と、充足感 (その自尊源でどれだけ満たされているか) を尋ねた。17の自尊源それぞれが3項目で測定される計51項目からなり、随伴性は5件法、充足感は4件法である。“友達との間で友情を感じる (友人とのつながり)”, “社会的に高く評価される (社会的な評価)”, “人として受け入れてもらえる (他者からの受容)”, “円滑に人づき合いができる (対人調和スキル)”, “容姿がよ

い (外見)”, “自分を磨くよう努力している (成長への努力)” といった項目からなる。

結 果

自尊感情の3 様態同士の関係性 三つの自尊感情 (優越感・全般的自尊感情・本来感) 同士の単相関係数を算出したところ、優越感と全般的自尊感情で $r = .63$, 本来感と全般的自尊感情で $r = .62$, 優越感と本来感で $r = .43$ であり、全て1%水準で有意であった。また、本来感を統制した場合の優越感と全般的自尊感情は $r = .51$, 優越感を統制した場合の本来感と全般的自尊感情は $r = .49$ であり共に1%水準で有意であったが、全般的自尊感情を統制した場合の優越感と本来感 $r = .07$ で有意ではなかった。

自己価値感の全般的随伴性と自尊源への随伴性・充足感, ならびに自尊感情の3 様態の関係性 自己価値感の全般的随伴性と自尊源への随伴性, ならびに充足感との間の単相関係数を算出した (Table 1, 2)。そ

Table 2
各自尊源での充足感と、全般的随伴性ならびに自尊感情の3様態の関係^{a) b)}

	充足感との単相関係数				充足感との偏相関係数 ^{c)}		
	全般的随伴性	優越感	自尊感情	本来感	優越感	自尊感情	本来感
対人関係							
親密な関係							
家族とのつながり	.00	.07	.12*	.08	-.01	.09	.00
友人とのつながり	-.08	.25**	.36**	.33**	.02	.17**	.15*
恋人とのつながり	.04	.26**	.23**	.29**	.14*	.01	.18**
関係の恩恵							
社会的な評価	.17**	.62**	.42**	.34**	.50**	.00	.09
他者からの受容	-.05	.48**	.48**	.42**	.25**	.15*	.17**
関係のスキル							
対人調和スキル	-.05	.39**	.41**	.44**	.18**	.08	.26**
意志表出スキル	-.17**	.42**	.50**	.53**	.16*	.15*	.32**
個人特長							
まじめさ	-.03	.38**	.40**	.36**	.17*	.14*	.14*
やさしさ	.02	.33**	.27**	.23**	.21**	.03	.08
外見	.18**	.58**	.38**	.25**	.48**	.02	-.01
知性	-.06	.59**	.44**	.32**	.44**	.08	.04
運動能力	.06	.36**	.32**	.17**	.23**	.13*	-.05
芸術的感性	-.03	.32**	.28**	.27**	.18**	.04	.12 [†]
生き方							
打ち込む活動	-.17**	.23**	.36**	.44**	-.01	.11 [†]	.29**
将来の目標	-.10 [†]	.25**	.38**	.40**	.00	.16*	.23**
成長への努力	-.11*	.39**	.42**	.43**	.17**	.10 [†]	.24**
過去の頑張り	-.11*	.28**	.34**	.31**	.09	.12*	.14*

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

a) 5%水準で有意であった係数をボールド体で示した。

b) 表中では、全般的自尊感情を自尊感情と略している。

c) 偏相関係数は三つの自尊感情同士を統制した値である。

例えば、本来感の偏相関係数は全般的自尊感情と優越感を統制した係数である。

の結果、自己価値感の全般的随伴性は、ほとんどの自尊源への随伴性と正の相関関係がみられたが、ほとんどの自尊源での充足感とは相関関係がみられなかった。

また、自尊感情の3様態と自己価値感の全般的随伴性との相関関係を検討した。単相関係数を算出した結果、自己価値感の全般的随伴性は優越感とは $r = .04$ であり有意な関連性が認められなかったが、全般的自尊感情とは $r = -.32$ 、本来感とは $r = -.35$ で共に1%水準で有意であった。さらに、三つの自尊感情（優越感・全般的自尊感情・本来感）同士を統制した偏相関係数を算出したところ、自己価値感の全般的随伴性は、優越感とは $r = .36$ 、全般的自尊感情とは $r = -.32$ 、本来感とは $r = -.23$ であり、全て1%水準で有意であった。

自尊源の随伴性と自尊感情の3様態 Figure 1の仮説モデルに基づいて自尊源の随伴性と自尊感情の3様態の関係性をモデル化し、これを構造方程式モデル

により検討した (Figure 2)。本来感は生き方への随伴性に、優越感是对人関係と個人特長への随伴性に有意に影響を与えていたが、その影響指数は低い水準に留まっていた。また、モデルの適合度は $\chi^2(2824) = 6463.400$, $\chi^2/df = 2.289$, CFI = .778, RMSEA = .069, GFI = .622, AGFI = .597であり、やや不十分な水準に留まっていた。そこで、モデルの不具合を特定するため、17の自尊源への随伴性と三つの自尊感情（優越感・全般的自尊感情・本来感）との単相関係数、ならびに17の自尊源への随伴性と三つの自尊感情同士を統制した偏相関係数を算出した (Table 1)。偏相関分析の結果を全体的にみると、優越感は個人特長の自尊源への随伴性と正の相関関係にある傾向がみられ、全般的自尊感情は個人特長の自尊源への随伴性と弱い負の相関関係にある傾向がみられ、本来感と各自尊源への随伴性には明確な相関関係の傾向はみられなかった。

自尊源の充足感と自尊感情の3様態 随伴性におけるモデルと同様に、自尊源の充足感と自尊感情の3様

態の関係性をモデル化し、これを構造方程式モデルにより検討した (Figure 2)。本来感は生き方への随伴に、優越感是对人関係と個人特長への随伴に有意に影響を与えており、随伴のモデルよりもそれらの係数はより強い水準を示していた。ただし、モデルの適合度は $\chi^2(2824)=6036.386$, $\chi^2/df=2.138$, CFI=.779, RMSEA=.065, GFI=.624, AGFI=.600 であり、やや不十分な水準に留まっていた。そこで、モデルの不具合を特定するため、17の自尊源での充足感と三つの自尊感情 (優越感・全般的自尊感情・本来感) との単相関係数、ならびに、17の自尊源への充足感と三つの自尊感情同士を統制した偏相関係数を算出した (Table 2)。偏相関分析の結果を全体的にみると、優越感とは個人特長や対人関係の自尊源での充足感と正の相関関係にある傾向がみられ、全般的自尊感情は各自尊源での充足感と明確な相関関係の傾向がみられず、本来感は対人関係や生き方の自尊源での充足感と正の相関関係にある傾向がみられた。

考 察

随伴性についての個人間アプローチと個人内アプローチの関係性 自己価値感の全般的随伴性は全ての自尊源への随伴性と正の相関関係にあった。この結果は、随伴性が単一次元で捉えられるという主張 (Kernis, 2003) を支持していると考えられる。ただし、相関係数の値は自尊源の種類により異なっており、自己価値感の全般的随伴性は生き方といった内外的な物事への随伴性よりも対人関係や個人特長といった外的な物事への随伴性をより強く反映していると考えられる。また、自尊源への随伴性とは対照的に、自尊源への充足感と自己価値感の全般的随伴性とは部分的

な弱い相関関係に留まっていた。これは、随伴性と充足感との概念的弁別性を示していると解釈できる。

自己価値感の全般的随伴性からみた自尊感情の3様態 偏相関分析の結果、自己価値感の全般的随伴性には本来感ならびに全般的自尊感情とは負の相関関係にある一方で、優越感とは正の相関関係にあることが示された。さらに、自尊感情の3様態同士の偏相関分析で示されたように、優越感と本来感とは関連していなかった。これらは、Deci & Ryan (1995) の考えに基づく予測と合致している。すなわち、Figure 1 で示されている三つの自尊感情 (優越感・全般的自尊感情・本来感) 同士の関係性が確認され、それら三つが自己価値の全般的随伴性 (Figure 1 の横軸) の一次元上に位置づけられることが確認されたと捉えられる。

各自尊源への随伴性からみた自尊感情の3様態 仮説モデルを検討した構造方程式モデルの結果、モデルの適合度は十分とは言えず、また、仮説とした本来感・優越感と各自尊源の随伴性への影響も比較的弱い水準に留まっていた。そこで、より詳しく検討するために、偏相関分析を実施した。

随伴性との偏相関関係をみると、優越感はおもに個人特長や対人関係における自尊源への随伴性と関連していた。可視化されやすい外見、成績で示されることの多い知性、走る速さや絵の上手さなどで示される運動能力や芸術的感性は、どれも具体的に外的成果としてその良し悪しが査定されやすく、日々の生活上での社会的比較の対象となる機会が多い領域であると考えられる。それゆえ、そうした領域に自己価値感が随伴していることと、社会的比較を通して得られる自己高揚の感覚である優越感とが関連することは構成概念的に妥当な結果であると捉えられる。さらに、優越感とは社会的な評価への随伴とも関連しており、これらの結果は、Figure 1 で想定された優越感と外的な自尊源との関連を支持するものと捉えられる。また、社会的な評価や個人特長についての自尊源と優越感の相関関係は、偏相関分析で得られた係数が単相関分析で得られた係数よりも増大していたことから、本来感と自尊感情を統制したことで優越感の特徴が際立って現れたものと考えられる。

本来感とは生き方における自尊源 (打ち込む活動・過去の頑張り) や、意思表示スキル、まじめさへの随伴性と関連していたが、その相関係数は非常に弱いものであった。これらの結果は、本来感が内的な自尊源への随伴性と関連する (Arndt & Schimel, 2003) とみなす考えよりも、むしろ、随伴性そのものとは関連しにくい自己感覚であると考え (Kernis, 2003) を支持していると捉えたほうが妥当であろう。

全般的自尊感情は、単相関分析の結果ではほとんど

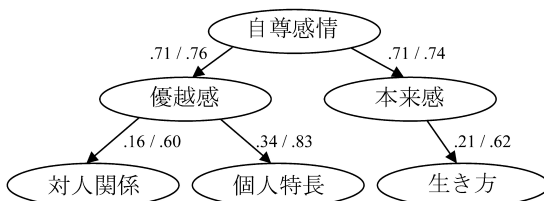


Figure 2. 構造方程式モデルによる検討

注) 各楕円は潜在変数を表す。優越感・自尊感情・本来感とはそれを測定する各顕在変数 (本来感であれば7項目) を規定し、対人関係・個人特長・生き方の潜在変数は各下位構造の潜在変数 (生き方であれば打ち込む活動・将来の目標・成長への努力・過去の頑張り) を規定し、さらにその下位の潜在変数はそれを測定する各顕在変数を規定する。全ての顕在変数、誤差、自尊源の下位構造に当たる潜在変数は省略した。図中の標準化係数は全て1%水準で有意であり、左にある数値が随伴性を、右にある数値が充足感を観測変数としたモデルにおける数値である。

の自尊源への随伴性と関連していなかった。しかし、本来感と優越感を統制した偏相関分析では、全般的自尊感情は弱い程度であるものの、いくつかの自尊源と負の相関関係にあった。これは、全般的自尊感情と優越感とのやや高めの相関関係が影響したものと推測される。これを確認するための補足的な分析として、全般的な自尊感情と各自尊源への随伴性の関連について、本来感のみを統制した偏相関係数と、優越感のみを統制した偏相関係数を算出した。その結果、後者においてのみ相関係数が負になっていた。全般的自尊感情と本来感とを比較した先行研究（伊藤・小玉, 2005）では、全般的自尊感情には随伴的な成分が含まれていることが示唆されている。優越感も含めて検討した本研究の結果は、全般的自尊感情に含まれる随伴的な成分は優越感と共変動する成分によるものであり、これを統制すると全般的自尊感情は自尊源への随伴性の高さとは関連しないことを示唆していると捉えられる。

各自尊源での充足感からみた自尊感情の3様態 充足感を観測変数とした仮説モデルを検討した構造方程式モデルの結果、仮説を支持する影響指標がみられ、随伴性の場合よりも良好なモデルの適合が得られたものの、適合度の水準は十分とは言えない結果であった。そこで、随伴性の場合と同様、偏相関分析による詳細な検討を行った。

充足感との偏相関関係をみると、優越感は個人特長に関わる自尊源や社会的な評価における充足感と関連しており、各自尊源への随伴性との関連と同様に仮説が支持されたと捉えられる。また、優越感は生き方における自尊源とはほとんど関連していないことが示された。個々人の生き方は個々人の価値観が反映され、また、他者がどの程度生き方で充足しているのかは知りにくいと考えられるため、自分が他者よりも優れた生き方をしているという優劣の判断は難しいと考えられる。そのため、その自尊源での充足感と優越感とは関連しないのだろうと考えられる。

本来感は生き方における自尊源の充足感の全てと相関関係にあった。自分自身の活動に打ち込めていること、目標を明確に抱えていること、成長へと努力していることは、自分自身の価値観が強く反映されることであると考えられる。また、自分なりの過去を受け入れられていることは、充実した自己物語（榎本, 2002）を形成していることとつながると考えられる。このように、生き方における充足感自分なりの価値観や自己物語といった内的な自己の充足として考えられ、内的な自尊源と本来感との関連を想定した仮説が支持されたと捉えられる。

また、仮説に反した結果として、本来感が対人関係における自尊源の充足感と関連していた結果が挙げられる。関連していたのは、友人や恋人とのつながり

や、他者からの受容、対人調和スキル、意思表出スキルであった。これらに加え、本来感は社会的な評価とは関連していなかったことに注目すべきであると思われる。自分の意見を自由に言えるような、他者から自己の存在性（being）を受容される対人関係性と、特定領域の達成（doing）を評価されることのみで自己が認められる対人関係性は区別されて理解されている（Arndt & Schimel, 2003; Kernis, 2003）。とくに、他者から存在性を無条件に受容されることは本当の自尊感情（すなわち本来感）を促進させるが、何らかの価値観に従った達成のみが他者から評価されることは随伴性自尊感情を促進させると考えられている（Deci & Ryan, 1995）。優越感と社会的な評価における充足感との関連も含めて考慮すると、本研究の結果はこうした考えに沿ったものとして捉えられる。

全般的自尊感情は、単相関係数とみるとほとんどの自尊源での充足感と関連がみられたが、本来感と優越感を統制した偏相関係数をみるとそれらはかなり弱いものであった。これらの結果は、Figure 1 で示された仮説モデルの縦軸の位置関係を支持する結果として捉えられる。すなわち、全般的自尊感情は概念として本来感や優越感を含んだより抽象的な感情であるため、本来感や優越感といったより具体的な感覚を統制したとき、具体性の高い自尊源とは直接的に関連しないのだと考えられる。

結 論

本研究によって、個人間アプローチによる自己価値感の全体的な随伴性、個人内アプローチによる各自尊源の随伴性と充足感、そして自尊感情の3様態の概念的な位置づけを想定した仮説モデルは部分的に支持されたと考えられる。すなわち、全般的自尊感情のなかには本来感と優越感という下位様態が想定され、それらの違いは、自己価値感の全般的随伴性の程度と、随伴する自尊源の種類の相違によって説明できると言えるだろう。優越感はある全般的な随伴性と関連するとともに、外的な自尊源への随伴性と関連するという仮説はほぼ支持された。本来感については、全般的な随伴性と逆相関するという個人間アプローチの観点からは仮説が支持されたが、内的な自尊源である生き方への随伴性と関連するという仮説は支持されず、さらに、対人関係や個人特長に含まれる一部の自尊源への随伴性や充足感に関わるという結果もみられた。こうした、仮説モデルでは想定していなかった関連性のために、当初のモデルを検討した構造方程式モデルの適合度が十分な水準とはならなかったのだと考えられる。

Roberts (2006) は、個々人の自尊感情のあり様を把握することが有効な心理臨床的介入において重要であることを指摘している。自尊感情そのものは臨床的介入が難しい抽象的な特性として考えられてきた

(Baumeister et al., 2003) が、本研究の結果はより具体的な自尊源に注目することでその介入法に示唆を与えている。すなわち、外的な自尊源への随伴を内的な自尊源への随伴に移行させることで、優越感という不適応的な自尊感情から本来感という適応的な自尊感情へと移行させ得ることが想定できる。今後は、そうした介入手続きの方法が明らかにされることが期待される。

また、今後の検討課題として自尊源の随伴性と充足感の概念的な位置づけの明確化が挙げられる。本研究の仮説では自尊感情の3様態と自尊源との関係性について、随伴性と充足感との間でとくに区別した考えをもたなかった。しかし、構造方程式モデルの結果に現れているように、自尊感情の3様態と自尊源との関係性は、随伴性の指標よりも充足感の指標においてより仮説に整合した結果が得られたと考えられる。すなわち、どの物事に自尊感情が随伴しているのかについての認知よりも、実際的にどの物事で充足感を得られているのかについての査定のほうが自尊感情の3様態をよりの確に弁別すると捉えられる。先行研究では随伴性と充足感とを区別した検討がされてこなかったが、今後はこうした自己認知と感情の充足との区別を踏まえ、その過程の差異を検討することが求められると考えられる。

引用文献

- Arndt, J., & Schimel, J. (2003). Will the real self-esteem please stand up?: Toward an optimal understanding of the nature, functions, sources of self-esteem. *Psychological Inquiry*, **14**, 27-31.
- Baumeister, R.F., Campbell, J.D., Krueger, J.L., & Vohs, K.D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, **4**, 1-44.
- Baumeister, R.F., Heatherton, T.F., & Tice, D.M. (1993). When ego threats lead to self-regulation failure: Negative consequences of high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 141-156.
- Brown, J.D., & Marshall, M.A. (2006). The three faces of self-esteem. In M.H. Kernis (Ed.), *Self-esteem issues and answers: A sourcebook of current perspectives*. New York: Taylor & Francis. pp. 4-9.
- Crocker, J., Luhtanen, R.K., Cooper, M.L., & Bouvrette, S. (2003). Contingencies of self-worth in college students: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 894-908.
- Crocker, J., & Wolfe, C.T. (2001). Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, **108**, 593-623.
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M.H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum. pp.31-46.
- 榎本 博明 (2002). “ほんとうの自分”のつくり方——自己物語の心理学—— 講談社 (Enomoto, H.)
- Heatherton, T.F., & Wyland, C.L. (2003). Assessing self-esteem. In L.J. Shane & C.R. Snyder (Eds.), *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures*. Washington, DC: American Psychological Association. pp. 219-233.
- 伊藤 正哉・川崎 直樹・小玉 正博 (2006). 随伴性と充足性を考慮した自尊源尺度の作成——大学生の自尊心の支え方(1)—— 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 495.
- (Ito, M., Kawasaki, N., & Kodama, M.)
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響 教育心理学研究, **53**, 74-85.
- (Ito, M., & Kodama, M. (2005). Sense of authenticity, self-esteem, and subjective and psychological well-being. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **53**, 74-85.)
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討——本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—— 教育心理学研究, **54**, 222-232.
- (Ito, M., & Kodama, M. (2006). Self-feelings that supports intentional self-development in university students: Sense of authenticity and global and contingent self-esteem. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **54**, 222-232.)
- 川崎 直樹・伊藤 正哉・小玉 正博 (2006). 自尊源への随伴性・充足性と心理的特徴との関連——大学生の自尊心の支え方(2)—— 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 496.
- (Kawasaki, N., Ito, M., & Kodama, M.)
- Kernis, M.H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, **14**, 1-26.
- 小塩 真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版 (Oshio, A.)
- Paradise, A., & Kernis, M.H. (1999). *Development of the contingent self-esteem scale*. Unpublished data, University of Georgia. Athens, Georgia.
- Raskin, R.N., & Hall, C.S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Roberts, J.E. (2006). Self-esteem from a clinical perspective. In M.H. Kernis (Ed.), *Self-esteem issues and answers: A sourcebook of current perspectives*. New York: Taylor & Francis. pp. 298-305.
- Rhodewalt, F., & Tragakis, M.W. (2003). Self-esteem and self-regulation: Toward optimal studies of self-esteem. *Psychological Inquiry*, **14**, 66-70.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Sargent, J.T., Crocker, J., & Luhtanen, R.K. (2006). Contingencies of self-worth and depressive symp-

- toms in college students. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **25**, 628–646.
- Tracy, J.J., & Robins, R.W. (2003). “Death of a (narcissistic) salesman”: An integrative model of fragile self-esteem. *Psychological Inquiry*, **14**, 57–62.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64–68.
- (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. (1982). The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64–68.)
- 2007. 11. 19 受稿, 2010. 7. 3 受理 ——